

聖書：Ⅱペテロ 2：17～22

説教題：義の道を知っていながら

日時：2018年4月8日（朝拝）

ペテロの手紙第二の2章。偽教師たちについての厳しい言葉が続く章です。私たちはもしかすると当時の偽教師たちと今日の私たちとの間に何の関係があるかと思うかもしれません。このような箇所を今日、読む意味はあるのかと。しかしペテロは2章1節で、このような偽教師は神の民の歴史にいつも現れて来たと言いました。この手紙が書かれた当時の偽教師たちは、ただポッとその時代に現れて来た者たちではなく、旧約時代の偽預言者たちと同じ線に立つ人たちであると。ですから同じような人たちは今日も現れ得ると言えます。いや絶えず現れているとさえ見るべきではないでしょうか。ですから私たちも良く警戒しなくては！ということになります。ペテロは自分が間もなく地上を去ることを意識しながらも、残されたわずかの時間でこの手紙を書いてくれました。ですから私たちは彼のことばによく聞いて、これを受け止め、自分に生かさなくてはなりません。あるいはこの手紙をペテロに記させた究極のお方は聖霊になりますが、聖霊はいつの時代にも必要な言葉として、この言葉を聖書に含めさせました。ですから私たちは聖霊がなおこの手紙を通して今日も語ってくださることに耳を傾け、従って行くべきであるということになります。

さてペテロはこの2章で、偽教師たちについて色々なことを語って来ましたが、今日の箇所はその最後の部分となります。大きくここを前半の3節と後半の3節に分けて見ることができると思います。まず前半でペテロが述べていることは、偽教師たちはどんな人たちか、その特徴についてです。まず17節：「この者たちは水がない泉、突風で吹き払われる霧です。彼らには深い闇が用意されています。」最初の二つの表現は、どちらも人を欺くものということです。泉とは普通、水の湧き出る場所です。砂漠や荒野を旅する人たちにとって、泉はいのちを与えてくれる場所。旅人に生気を与え、生き返らせてくれる場所です。ところがそのような期待をもって近づいて見ると、そこに水がない。それによって非常にガッカリさせられる。二つ目の霧のたとえも同じです。霧が現れることによって、水分が地を潤してくれるのではないかと期待させられる。ところが風が吹いて来て、それはどこかに消えてしまう。一時的なものでしかなかった。偽教師たちはそのように人々にアピールし、人々を引きつけはするが、実質は何も与えないということです。そういう彼らに用意されて

いるのは深い闇です。神からの光がない、それが一切取り去られた、全くの絶望状態ということです。

このような彼らの戦術が 18 節です。「彼らは、むなしいことを大げさに語り、迷いの中に生きている人々の間から現に逃げ出しつつある人たちを、肉欲と好色によって誘惑しています。」 彼らは中身がないのに大言壮語します。自分たちの伝えていることはすごいことのように宣伝します。そのターゲットは、ようやく誤った生き方から逃れようとしている人たち、すなわち新しい信者たちです。真理に堅く立っている人を動かすことはできませんが、まだしっかり定まっていない人は動かすことが可能です。その誘惑方法は「肉欲と好色によって」。これが彼らの特徴です。前回見た 14 節に「その目は姦淫に満ち、罪に飽くことがなく、心が定まらない人たちを誘惑し、心は貪欲で鍛えられています。」とありました。彼らはさばきの日など来ないと言って、不道德な生活を容認していました。自分たちは新しい知識、特別の知識を持っていると言って誇りつつ、実生活では道徳的な歩みに関心を払っていませんでした。そして主を信じて誤った生き方から逃れようとしている人々に、そんなに気まじめに生きる必要はない。今までの生活もそれほど間違っていないと言って誘惑していた。しかし人間の「体」と「心」はつながっています。体が乱れれば、心もさらに乱れて行きます。

そして 19 節にあるように、彼らはこれこそ自由な生き方だと宣伝していました。救われた人はもはや律法には縛られない。あの窮屈なクリスチャンたちを見よ！我々はもっと自由である！と。そう言いながら自分自身が滅びの奴隷となっているとペテロは言います。自由であると主張しながら、実際は欲望の奴隷、罪の奴隷で、滅びに至るべく縛られていると。聖書が述べる本当の自由とは、自分の好きなことをしたいようにする自由ではなく、御言葉に従うことを選び取れる自由、あるいは正しい道を選び取れる自由です。罪に支配された人が、したいことをどこまでもすることとは違います。本人はそれが自由だと思い込んでいるかもしれませんが、それは実は欲望の奴隷なのであって、最後の滅びへとしょっ引かれて行くところの不自由な状態なのです。

さて後半の 20 節以降では、このような偽教師たちの刈り取る報いのことが述べられています。これは偽教師たちだけでなく、偽教師たちに従うすべての人にも当てはまること、すなわち私たちへの警告としても語られていると思います。まず 20 節にこうあります。「主であり、救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れから

逃れたのに、再びそれに巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪くなります。」ここに偽教師たちは、一旦はイエス・キリストを知って、世の汚れから逃れる道を進んだのに、再び逆の道へ逆戻りして行ったということが述べられています。ここにイエス・キリストを知ることは、世の汚れから逃れる道に行くことだと示されています。イエス・キリストを知ることは、すなわちイエス・キリストと結ばれ、イエス・キリストとの交わりの内に歩むことは、この世の汚れから離れて行くこと。この後、21 節に「義の道」とある通りです。イエス・キリストを信じて、この方と結ばれる生活は、この世の汚れから離れて義の道に行くことです。ところが彼らは前の生活へと戻って行った。そういう人の最後は、前よりもっと悪いものになると言われています。思い起こされるのはイエス様が語られた7つの悪霊の話です。マタイの福音書12章43～45節に、汚れた霊が人から出て行って、休み場を探すが見つからないので、出てきた家に戻ろうと言って帰って見ると、家は空いていて、掃除してきちんと片づけられていた。そこで悪霊は出かけて行って、自分よりも悪い他の霊を7つ連れて来て、みな入りこんで住む。そうすると「その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります」とイエス様は言われました。まさにそれと同じ表現です。

しかしある人はここで、ある疑問を持つかもしれません。果たして一旦イエス様を信じた人が再び前の状態に戻ることがあり得るのだろうか。信仰者が信仰を失うことはあるのだろうか。もし人が信仰を持つとすれば、それはそれに先立つ神の恵みのみわざによるのであって、神によって救いの働きを始められた人は最後まで行くと聖書は他の箇所では教えているのではないだろうか。なのに途中まで行って、そこから落ちるといようなことなどあるのだろうか。答えから先に言えば、もしある人が本当に信仰を捨てて救いに至らなかったとすれば、それは聖書の説明によれば、一旦本当に信仰を持ったが、その後、失われたということではなく、実は最初から真の信仰は持っていなかったのだということです。その人は私たちの目には同じ信仰を持っているように見えたただけであった。確かにその人は一緒に教会生活をし、同じ御言葉を聞き、ある意味で特別の恵みにあずかりました。ある種の恵みを味わい知りました。しかし真実な意味でイエス・キリストへの信仰は持っていなかったということです。ヨハネの手紙第一2章19節：「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。」

そんな彼らについてペテロは21節でこう言います。「義の道を知っていながら、自分たちに伝えられた聖なる戒めから再び離れるよりは、義の道を知らなかったほうがよかったのです。」ここに、先に触れたように、キリスト教のことが「義の道」と言われています。これを知らない方がまだ良かったと言われていています。もちろん、この義の道を知らなければ誰も救われません。滅びを身に招くだけです。しかしペテロが言っていることは、知ることは大きな責任を伴うということです。知らない人もさばかれますが、知った上でそれを拒否すれば一層重くさばかれる。ルカの福音書12章47～48:「主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべは、むちでひどく打たれます。しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。」偽教師たちは主を知り、主の光を味わった上で、これを意図的に捨てました。世の汚れから逃れる道を示されたのに、かえって神の喜ばない道を選び取り、積極的に情欲に身を委ね、他の人たちまで巻き込んでいます。そんな彼らはさばきの日に厳しく、その責任を問われるということです。

そしてペテロは最後の22節で、二つのことわざを引用します。「『犬は自分が吐いた物に戻る』、『豚は身を洗って、また泥の中を転がる』という、ことわざどおりのことが、彼らに起こっているのです。」犬は今日、愛らしいペットとして私たちの間では考えられていますが、聖書時代には群れをなしてうろつきまわり、ゴミ箱を食い漁っては散らかして行く、たちの悪い汚れた動物と見なされていました。ですからユダヤ人は異邦人を「犬」と呼んで見下げていました。その犬についてこう言われています。「犬は自分が吐いた物に戻る。」似たような言葉が箴言26章11節にあります。「犬が自分の吐いた物に戻って来るように、愚かな者は自分の愚かさを繰り返す。」吐くという行為は、悪いものを外に出す行為です。犬は自分にとって有害なものを外に出すために吐いたわけですが、ところが犬は、その吐いたもののところに戻って来る。そしてそれを舐め、もう一度、体内に取り入れてしまう。すなわち偽教師たちはイエス・キリストを知って世の汚れから一旦逃れたのに、また元の生活に戻ってしまうということを言っているのでしょうか。もう一つの豚についてのことわざも同じです。豚は水で良く洗ってもらえばきれいになります。白い体と白い毛。適当な大きさならペットとして飼いたいと思えるのではないのでしょうか。しかし豚は体を洗ってもらっても、わざわざ汚いところに進んで行って、ついにはその体を泥の中にこすりつけてしまいます。これも結局以前の

生活へと戻って行く偽教師たち、またその彼らに指導される人たちのことを言っているのでしょうか。

果たしてこれらの警告を聞いて私たちはどうでしょうか。私たちは今日の時代の偽教師たちにだまされていることはないでしょうか。改めて今日の御言葉から確認することは、キリスト教は「義の道」であるということです。キリスト教信仰は「正しい生活」に現れ出るものでなければならないということです。私たちは正しい行いをするによって救われるのではありません。神の前で神に認められる正しい行いができる人など一人もいません。すべての人は罪人です。その罪人が救われるのは、ただ神の恵みによります。しかし主イエス・キリストを信じて、罪の赦しを頂いた人は、主と結ばれて、正しい行いへ進んで行く人でなければならないということも聖書は述べています。キリスト教信仰とは、ただ自分の罪を告白し、自分のためにイエス様が十字架にかかってくださったことを信じて終わりのものではありません。自分は良い行いなどできませんと言って、イエス様にすがり、そうして罪の生活を許容し続けるのがキリスト教ではありません。これではキリスト教は罪の生活を助長する悪質な、低級な宗教になってしまいます。私たちは確かにイエス様を信じて罪を赦され、さばきから解放されますが、本当にイエス様に結び付いた人は、イエス様に結び付いた者らしい「いのち」が具体的に現れ出る者でなければなりません。まことのぶどうの木に結ばれた枝は、木から流れて来るいのちによって必ず実を結びます。このいのちは「敬虔」で特徴づけられる命です。神が喜ぶことを行おうとする命です。この世にある間、私たちは完全な状態には達しませんが、イエス様と結ばれて日々新しく造り変えられて行きます。そしてそのゴールが1章4節に示されておりましたように、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れること、そして神のご性質にあずかる者となることです。しかし偽教師たちは、このような方向を向いていませんでした。むしろ自堕落な生活を OK としておりました。ともすると今日の私たちにも、そのような考え方があるということはないでしょうか。救いはただ神の恵みによるのだから良い行いなどいらぬ。私たちにそれができないからイエス様は十字架にかかってくださったのであって、私たちはそのことを認め、感謝すればそれで良い。それしかできない。どうせ私たちは罪人である。だから几帳面に律法に捕らわれる必要もない。イエス様はそこから解放してくださったのだから、そのことを感謝して、あまり気にせず、もっと気楽に、自由に、無理をせず、自分の思う通りに生きて良いのではないか。しかしこのような主張に従うことは自由な生活ではなく、実は奴隷の生活です。実質的に前と何ら変わらない生活、いや今日の御言葉によれば、もっと悪い状態に至る

生活ではないでしょうか。「豚はまた泥の中へ行って転がる」ということと同じであるということはないでしょうか。

私たちはペテロの警告のことばに聞きたいと思います。キリスト教は「義の道」です。生まれながらの私たちに、そのための力はありませんが、私たちの主が歩ませてくださいます。1章3節に「主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔をもたらずすべてのものを私たちに与える」とありました。私たちも今日の偽教師たちに、またそのメッセージにだまされないようにしたいと思います。そうではなく、使徒たちを通して語られた正しい福音にしっかり聞いて歩みたい。主が導いてくださるのは「義の道」です。主はより頼む者に「この道」を歩ませてくださいます。そして神に似る者となるまでの歩みを導いてくださいます。そうして義の宿る新しい天と新しい地へと私たちを導き入れてくださいます(3章13節)。この聖書が示すビジョンをしっかり掲げて、私たちは勧められている正しい道をもう一度歩み出したい。この約束を感謝して、あらゆる努力をして、1章5〜7節で語られた徳を増し加える歩みへと進みたい。そうしてついに救いの道を最後まで歩ませていただき、やがての再臨の日を喜びをもって迎え、義で特徴づけられる新しい天と新しい地に入る時には、そこまでの歩みを導いてくださった神と主イエスにすべての栄光を帰す、そのような歩みへ進みたいと思います。